



TITLE:

吉村達次君の人柄をしのんで

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 吉村達次君の人柄をしのんで. 経済論叢 1966, 97(2): 241-242

ISSUE DATE:

1966-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/133113>

RIGHT:

經濟論叢

第九十七卷 第二號

哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

国債発行と金融政策	中 谷 実	1
アージリスの組織理論 (1)	田 杉 競	16
貸借対照表という用語の創出過程	高 寺 貞 男	30
独占価格と生産価格	松 石 勝 彦	51

記 事

吉村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稲垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

吉村達次君の人柄をしのんで

松 井 清

1月23日吉村君の告別式の日、わたくしは主催者の1人として、式に参列して下さる人々をお迎えするために、3、4人の同僚とともに吉村氏宅の入口に立っていた。だから式に参列して下さった人々のほとんどすべての顔に接した。東京から来たM君の顔もみえた。京都の病院の事務員として働いているY君らの顔もみえた。その他K君、E君等々。これらすべての諸君は、やや大げさというならば、戦後京大の学生運動史を代表する人々である。これらの人々のなかには、今日も依然として誠実に解放運動を続けている人ももちろんいる。しかしかなり多くの人が、いろいろの原因からいま解放運動の戦列を去っている。そんな人々も吉村君の人柄をしのんで告別式に参列している。これはやはり吉村君の人柄の良さを示すものであろう。しかしそれはあの清濁あわせのむとといった一部の古い日本人のよさ？ではない。いやその点についていうならば、吉村君は原則に非常に忠実な人であり、清濁あわせのまないタイプの人であった。ただ彼は自分と考え方のちがう人々に接するとき、それらの人々をつっぱなすというようなことはなく、静かに根気よく説得するというタイプの人であった。その誠実さが、いまはちがった考え方になった人々をもひきつけているのであろう。

わたくしの吉村君との接触は戦前彼が学生であった時代にまでさかのぼる。その頃わたくしは講師として外国語経済書の講読をやっていたが、当時の吉村君は、「国民経済研究会」を組織して活躍していた。戦争中のことであり、わたくしは召集をうけて軍隊に入ったりしたので、深くつきあったわけではない。しかしこの「国民経済研究会」によった当時の学生諸君の、全部とはいわないまでも、大部分のものの勉強をしたかったのが、社会科学であったことはいままでもない。天皇制ファシズムの下で、「社会科学研究会」という名も許されず、当時はやりの「国民経済研究会」名を借りていただけのことである。だからのちのマルクス主義経済学者として吉村君の素地は、すでにこの学生時代から次第に形づくられていたといっても間違いなからう。

卒業後彼も当時は多くの青年がそうであったように軍隊に召集され、ニューブリテン島のラバウルに行っている。わたくし自身も約半年ほどラバウルに駐留したことがあるが、もちろん吉村君に会ったことはないし、その後、ラバウルに居たのが、吉村君と同じ頃であったかどうかについて詳しく話しあったこともない。だから正確ではないが、

いまこれを書きながら考えてみると、1943年4月頃、わたくしがラバウルを離れてから後に吉村君はラバウルに行ったのではないかと思われる。もしそうだとするならば、すでにその頃から目立っていた戦局の悪化は、ラバウルでの兵隊生活を益々苦しいものとしたにちがいない。その苦しい兵隊生活が彼の健康に影響しないわけではなく、ひいては彼の死のなにがしの原因となっていたのではないであろうか。学生時代の検挙といい、軍隊への召集といい、当時の天皇制ファシズムに対する憎しみの気持を、いままた新にしないわけにはゆかない。

戦後経済学部の手助として京大に復帰されてからの、研究と科学運動への積極的な参加、その多彩な活動と終始変らなかつたその誠実さは多くの人々の知られる通りである。順序を追ってあげてゆくならば、1947年京大の職員組合が創立され、1948年には折から発せられた公務員のスト禁止に関するマッカーサー書簡をけて京大始って以来の全学ストがおこなわれた。このストに当っては、もっとも活動的な闘争委員として縦横に活躍している。さらに日本民主主義科学者協会京都支部の発展に対する吉村君の功績も忘れることのできないものであろう。民科の仕事に参加された多くの人々は、その経過した殆んどすべての時期に、何らかの形で吉村君がこれに積極的に協力していたことを記憶されているにちがいない。彼は地味な、いわゆる縁の下の力持ち的な仕事を喜んで引受ける人であった。民科の組織が、いろいろの原因から弱体化し、これに代る科学者の全国組織として日本科学者会議が発足するに当たっても、最近の疲労ぎみの肉体的条件にも拘らず、吉村君が並々ならぬ情熱をこれに傾けられていたことは、人々の記憶に新しいところである。

さらにわたくしにとって忘れることのできないのは、1963年に発足した日中経済学交流会に対する吉村君の貢献である。形の上では、わたくしが代表幹事ということになっているけれども、実質的に京大でこの会を発足され、推進されていたのは、吉村君と木原正雄君であったといってよい。1964年夏吉村君は、同志社の住谷悦治総長、京大の豊崎稔教授（当時）、立命大の小椋広勝教授とともに京都経済学代表団の一員として訪中され、見聞をひろめられるとともに、日中の学術交流について数々の業績をのこしてきている。最近の吉村君は、マルクス・レーニン主義の純潔をまもる中国の人民を心から愛し、また中国の人民から愛されていた。吉村君の死を知って、中国科学院哲学社会科学部会の責任者張友漁先生から、わたくしの手元に次のような電報がとどいている。

「吉村達次教授が不幸にも1月21日逝去されたことを知り驚きました。謹んで哀悼の意を示します。張 友 漁」